

〈幼児教育〉

好奇心や探究心を育むための援助の工夫 — 幼稚園における身近な自然環境を活かした遊びを通して—

宜野湾市立普天間幼稚園 教諭 高江洲 さくら

I テーマ設定の理由

現代は、社会の変化に伴い子どもを取り巻く生活環境が大きく変化し、子どもが身近に遊べる公園や広場などが減少している。また、スマートフォン、タブレットなど情報機器の発達により、虫捕りや泥遊びなど、子どもが直接自然と触れあって遊ぶ体験が減少している。これらの社会背景を受け、様々な変化に向き合い他者と協働して課題解決することができるよう、2018年度施行の幼稚園教育要領では、幼稚園教育において育みたい資質・能力及び幼児期の終わりまでに育ってほしい姿が新たに示された。

その中で、「自然との関わり、生命尊重」では、「自然に触れて感動する体験を通して、自然の変化などを感じ取り、好奇心や探究心をもって考え言葉などで表現しながら、身近な事象への関心が高まるとともに、自然への愛情や畏敬の念をもつようになる。」と、幼児期の子どもと自然との関わりの必要性が明記されている。また、幼稚園教育要領解説の総説では、「幼稚園教育においては、教育内容に基づいた計画的な環境をつくり出し、（中略）その環境に関わって幼児が主体性を十分に発揮して展開する生活を通して、望ましい方向に向かって幼児の発達を促すようにすること」と示されており、環境を通して行う幼稚園教育の特性が明記されている。これらを踏まえ、幼児が身近な環境と十分に関わりながら、様々な経験を重ねていく中で、生涯にわたる人格形成の基礎を培っていくことから、幼稚園教育の中で環境のもつ役割は非常に重要である。

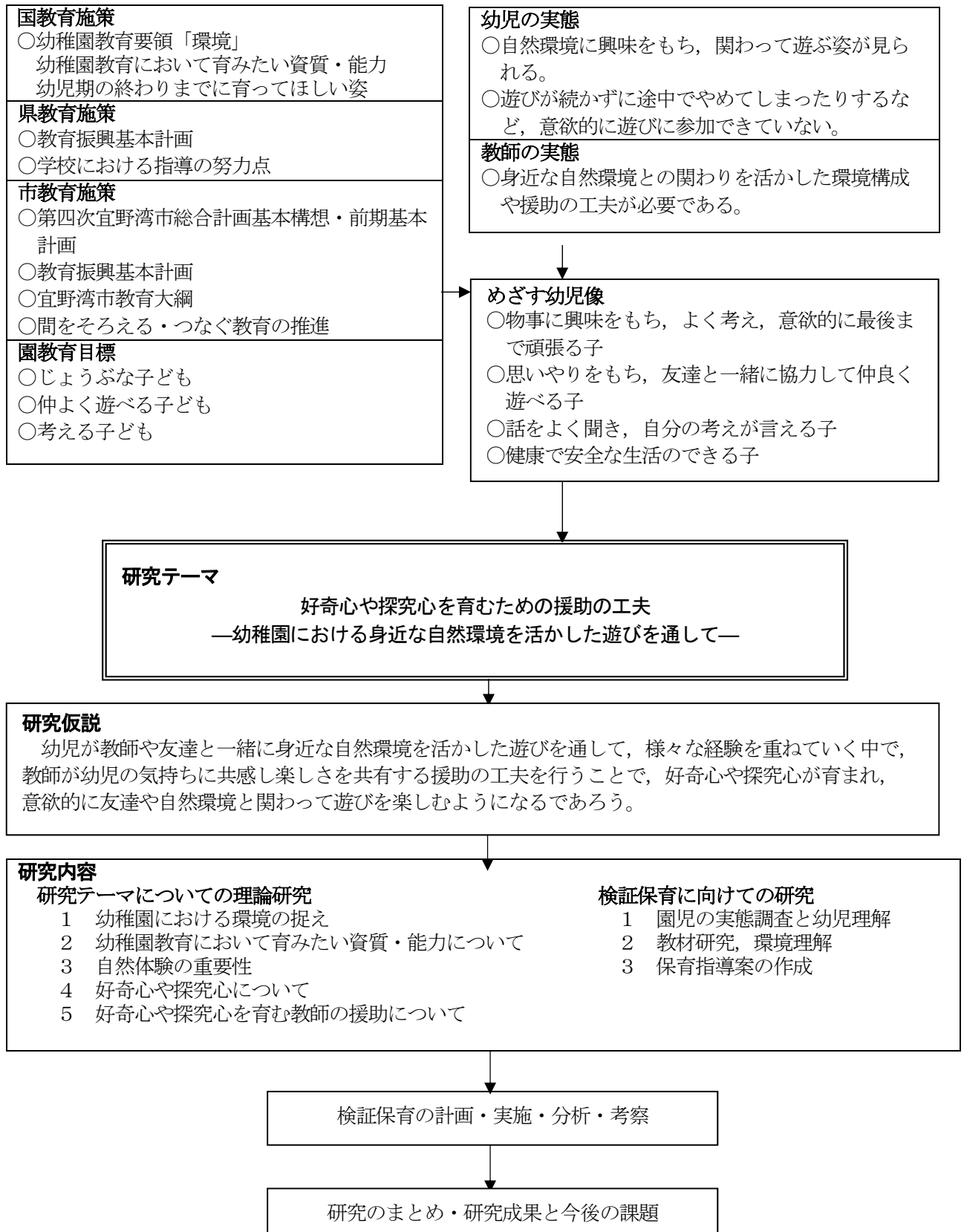
本園の園児の実態を見てみると、戸外遊びを好み、園庭にある草花の観察をしたり、蝶やバッタなどの虫捕りをしたり、自然に興味をもって関わって遊ぶ姿も多く見られる。その一方で、自然に興味や関心が低く、室内遊びを好み、砂や泥、生き物などに触れることに苦手意識のある子もいる。

また、遊びが続かずに途中でやめてしまったり、何をして良いのかわからずに他の子の遊ぶ様子をしばらく眺めていたりする子なども見られる。興味や関心をもって自分から積極的に関わったり、様々なことに挑戦したりしながら遊ぶ姿が見られず、意欲的に遊びに参加できていない子も見られる。

つまり、それぞれ遊びを楽しむ姿は見られるが、友達の興味や関心に対して共感したり、刺激を受けあったりして主体的に遊びを進めていこうとする姿が見られず、日頃から意欲をもって遊びを楽しんでほしいと実感している。また、本園の園庭には大きなガジュマルの木があり、魅力的で恵まれた自然環境があるにも関わらず、身近な自然環境との触れあいとして効果的に活用できておらず、身近な自然環境を活かした環境構成や援助の工夫に必要性を感じている。

そこで、本研究では身近な自然環境を活かした遊びを通して、幼児が様々な経験を重ねていく中で、教師が幼児の気持ちに共感したり、遊びの楽しさや場を共有する援助のあり方を考えたい。これらの援助を通して、他の子からの刺激を受け、心を動かされ、自ら環境と関わる意欲へと繋がり、好奇心や探究心が育まれていくのではないかと考える。また、教師が保育の振り返りを通して幼児の心の動きを捉え、幼児理解を深めて環境構成や援助へと繋げていくことで、幼児は意欲的に身近な自然環境へと関わり、好奇心や探究心が深まり、遊びが深まるのではないかと考え、本テーマを設定した。

II 研究構想図



Ⅲ 研究内容

1 幼稚園における環境の捉え

(1) 環境を通して行う教育

幼児期の子ども達は、日々環境から刺激や影響を受けながら成長し、学んでいる。

幼稚園教育要領解説（文部科学省 2018）では、環境を通して行う教育の意義として「幼児期の教育においては、幼児が生活を通して身近なあらゆる環境から、様々な活動を展開し、充実感や満足感を味わう体験を重ねていくことが重視されなければいけない。」と示されている。

幼児は環境との関わりを通して、考えたり、試行錯誤したりしながら、それを遊びの中に取り入れようとする。したがって、幼児期の環境を通して行う教育において「直接的・具体的な体験」が重要となる。また、幼児の環境へと関わりたいという意欲から、環境との深い関わりが成り立つため、「幼児の主体性」が何よりも大切にされなければならない。それらを踏まえ、まず幼児と環境の関係性を捉えていくことが重要である。

(2) 身近な環境とは

身近な環境とは、その子にとって関係をもち、意義をもっているものである。

小田豊他（2009）は、「『身近な環境』の実体は、単に子どもが生活している周囲にある物理的空間、子どもを取り巻くものの世界といったことではなく、子ども自身の具体的な体験を通して、子どもが感じ取るものだといえる。」と述べている。例を挙げると、恐竜に対して興味や関心をもち、絵本を見たり空き箱で制作をして恐竜の世界を作って遊ぶ子の姿があったとする。幼児と恐竜は時代の空間的な距離は遠いが、その子にとって恐竜は興味や関心、親しみが生まれる存在であり身近な環境となる。つまり、身近な環境とは、その環境が子どもにとって、なじみやすさや親しみやすさという心理的な距離が近くなって初めて身近な環境といえるのではないかと考える。

したがって、幼稚園の環境がそれぞれの子どもにとっての身近な環境となるよう、教師自身が身近な環境の一部として幼児から、より親しみがもてる存在となるよう寄り添った援助を行うことが大切である。

2 幼稚園教育において育みたい資質・能力について

幼稚園教育要領解説（文部科学省 2018）において「幼稚園教育では、遊びを展開する過程において、幼児は心身全体を働かせて活動するため、心身の様々な側面の発達にとって必要な経験が相互に関連し合い積み重ねられていく。つまり、幼児期は諸能力が個別に発達していくのではなく、相互に関連し合い、総合的に発達していくのである。」と記されている。また、「幼稚園においては、小学校以降の子どもの発達を見通しながら教育活動を展開し、幼稚園教育において育みたい資質・能力（表1）を育むことが大切である。」とも明記されている。そのため、その資質・能力を踏まえつつ「自然との関わり・生命尊重」を含めた「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」（表2）を意識しながら、幼児の実態と照らし合わせ幼児理解に努め、心身共に一体的に成長を育みながら保育実践をしていくことが大切だと捉える。さらに、幼稚園教育要領において「幼稚園教育は、（中略）小学校以降の生活や学習においても重要な自ら学ぶ意欲や自ら学ぶ力を養い、一人一人の資質・能力を育成することにつながっていくのである。」と示されている。本研究においても、幼稚園教育で育みたい資質・能力が小学校以降の生活や学習の基盤となることを念頭に置き、保育実践を行っていきたいと考える。

表1 幼稚園教育において育みたい資質・能力(幼稚園教育要領解説(文部科学省 2018))

資質・能力	概要
知識及び技能の基礎	豊かな体験を通じて、感じたり、気付いたり、分かったり、できるようになったりすること
思考力、判断力、表現力の基礎	気付いたことや、できるようになったことなどを使い、考えたり、試したり、工夫したり、表現したりすること
学びに向かう力、人間性等	心情、意欲、態度が育つ中で、よりよい生活を営もうとすること

表2 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿(幼稚園教育要領解説(文部科学省 2018))

(1) 健康な心と体	(6) 思考力の芽生え
(2) 自立心	(7) 自然との関わり・生命尊重
(3) 協同性	(8) 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚
(4) 道徳性・規範意識の芽生え	(9) 言葉による伝え合い
(5) 社会生活との関わり	(10) 豊かな感性と表現

3 自然体験の重要性

環境の中でも自然環境に触れて遊ぶことは幼児期において重要である。

幼稚園教育要領解説「環境」のねらいと内容においても「自然に触れて遊ぶ中で、幼児は全身で自然を感じるとる体験により、心がいやされると同時に、多くのことを学んでいる。特に、幼児期において、自然に触れて生活することの意味は大きい。」と明記されている。このように、幼児は自然との触れあいの中で、見る、触れるなどの諸感覚を使い、気付いたり、喜んだり、驚いたり心動かされ学んでいる。そのため、幼児期は自然との「出会い」が重要だと考える。

これまでの保育において、園庭の落ち葉拾いをするという何気ない生活の流れの中でも「大きい葉っぱがあったよ」「この形おもしろいね」と様々な気づきや反応を見せる子ども達の姿が見られ、自然との出会いの大切さを感じてきた。このように、自然と出会い感動するような体験は、自然に対する畏敬の念や生命の尊さ、親しみ、愛情などを育てるばかりでなく、それが基礎となり、好奇心や、探究心が芽生えたと捉える。好奇心や、探究心の芽生えから始まり、試行錯誤を積み重ね、主体的、意欲的に環境へと関わろうとするようになり、それが小学校以降への主体的な学びへとつながっていくと考える(図1)。したがって、本研究では、身近な自然環境との関わりに焦点をあてる。

その中で、見たり、触れたり、感じたりと「五感」を使って十分に自然と関わっていくことができるよう、教師の援助や言葉かけを工夫していく。さらに、五感を刺激する環境構成の工夫として、季節に合わせた園庭の環境づくりや様々な素材を活かした遊びを行う。

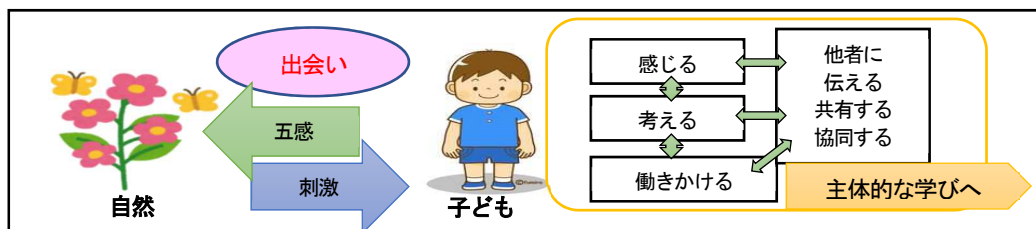


図1 自然の中での子どもの育ち(筆者作成)

4 好奇心や探究心について

(1) 好奇心を抱くには

好奇心とは、保育用語辞典第8版(森上史朗他 2015)において「未知のものや新奇なものに興味・関心をもち、そうしたものに対する接近や探索行動を引き起こす欲求のことである。」と示されている。

柴崎正行他（2009）は、子どもが好奇心を抱くには、「『①じかに体験する』『②人の存在』が重要なポイントとして述べている。実際に保育実践を通して、遊びの中で子ども自身が身近な自然に触れあったり体験したりする中で多くの気づきや発見がある。そのため、子どもが好奇心を抱くには、直接体験することが大きな要素となる。直に触って感触を味わったり、音を聞いたり、臭いを嗅いだりと直接体験することで興味や関心をもつことへと繋がる。また、柴崎氏が述べている「人の存在」として友達や教師、家族などが重要になると捉える。自分一人ではやりたくてもできないことを教師と一緒に挑戦することで達成したり、最初は興味や関心がなくても友達と一緒に行うことで楽しさを感じたりと、身近な人の果たす役割は大きなものがある。それに加えて、幼児が「やってみたい」と思うような魅力ある環境づくりこそが好奇心を抱くために非常に重要である。

(2) 探究心を深めるには

探究心とは、幼児保育学辞典（村山貞雄 1980）において「新奇な刺激や情報を求める能動的な知的精神活動。」と示されている。探究心をもつには「なぜ」「どうして」という不思議な思いから始まる。その思いから、環境へと関わり、「見る」「触れる」「聞く」「味わう」「臭いをかぐ」などの五感を通して、興味や関心をもったり、気づいたり考えたりすることで探究心が育まれていくと考える。また、柴崎正行他（2009）は、「探究心を育むためには、子どもの思いを受け止め、さらにその思いに応えることが大切です。子どもの思いに応えるということは、ある意味で『共感』することです。」と述べている。以上のことから、子どもの気持ちを受け止め、共感することでさらに深く知りたいという意欲がもてるように援助することが、探究心を育むための教師の大切な役割であると考えられる。したがって、子どもの気持ちに共感することを大切にしながら保育実践を行う。

さらに、幼児の育ちや一人一人の幼児理解を図りながら、遊びの様子を捉え、適切なタイミングでの援助の工夫を行っていくことで探究心を深めていきたいと考える。

(3) 好奇心や探究心が育まれる過程の捉え

日常的に子どもの興味や関心を見逃さず、子どもの目線で教師自身も好奇心や探究心をもって関わっていくことが大切である。そのような教師や友達との関わりの中で、子ども達は考え、試行錯誤をしていく。そこから気づきや発見が生まれ、探究心へと繋がり、達成感や満足感から「もっとやってみたい」という意識が芽生えていくと考える。そこで、好奇心や探究心が育まれる過程を図に表した（図2）。この図を踏まえ、子どもの遊びや生活の中から、教師が子ども達の興味や関心を見え、好奇心や探究心を育む機会を見逃さずに援助の工夫を行っていく。

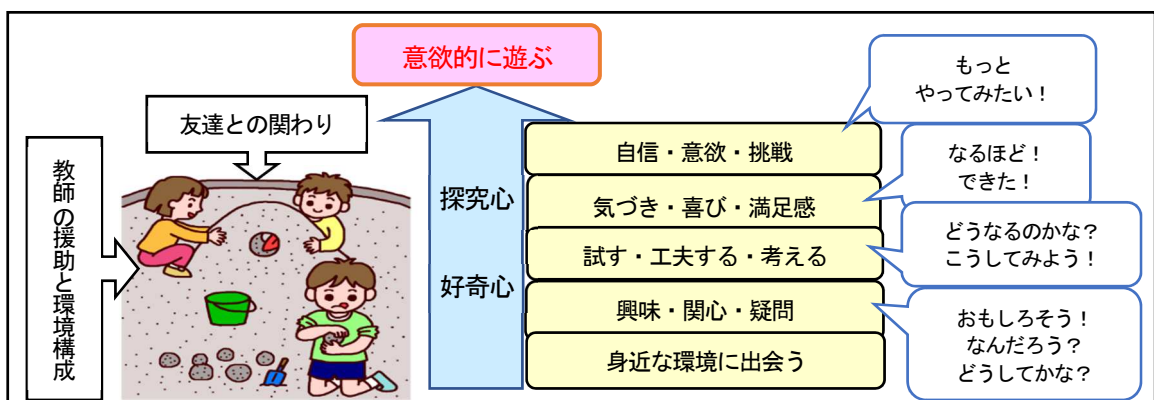


図2 好奇心や探究心が育まれる過程(筆者作成)

5 好奇心や探究心を育む教師の援助について

(1) 問いが生まれる援助の工夫

教師は幼児の「なぜ」「どうして」などの不思議さや疑問が生まれるような援助の工夫を行う。

実践方法として、教師が幼児の心を揺さぶるような言葉かけを行う。その際に、言葉かけのタイミングが重要である。さらに、言葉かけだけでなく、教師が表情や身振りを加えながら感じたことも表現していく。その中で、教師自身が自然環境に対する関わりや感性を磨くことを意識しながら、環境と能動的に関わっていくことが大切である。

また、自然環境と触れあって遊ぶ直接的な体験を基本に、友達との関わりを通して自然環境に触れあうなどの間接的な体験にも繋げながら、保育実践を行う。

(2) 幼児と自然、人、もの、できごとを「つなぐ、むすぶ」

幼稚園生活を送る中で「幼児と自然、人、もの、できごと」などを効果的に、「つなぐ、むすぶ」ことを意識して教師の援助の工夫を行っていきたいと考える。これらの援助は、幼児が主体的、意欲的に遊びや活動に向かうための教師の役割として重要である。

無藤隆(2007)は、領域「環境」における教師の役割として、「子どもと自然、ものをつなぐということは、教師が園の自然やものに自ら関心と親しみをもって働きかけ、子どもの遊びのモデルになりながら、子どもの興味や関心を引き出して、周りの環境に気付かせていく援助である。」と述べている(図3)。つまり教師は、一人の幼児の発見した事柄を他の幼児に伝えながら、幼児が相手の気づきを受け入れたり、自分の活動やイメージ、考えを持ち寄って繋げたり、新しい活動に発展させたりできるような援助をしていくことが大切である。

さらに、幼児と様々な環境を繋いでいく援助として、教師の関わる姿勢や言葉かけだけでなく、掲示物や絵本の活用等子ども達の視点で繋がりがわかるような環境構成を行うことが大切である。

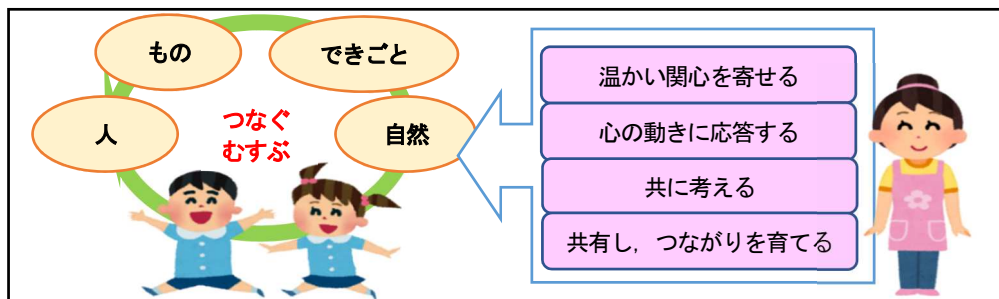


図3 教師の役割について(無藤隆(2007)参考)

(3) 自然環境と遊びをつなぐ環境構成の工夫

教師の役割の一つとして環境構成は重要である。幼児教育は、環境を通して行うものであるからこそ、幼児一人一人やクラス全体の育ちに応じ、幼児の姿に合わせた適切な環境構成が重要である。よって、遊び全体からの育ちを考え、どのような環境の構成や教師の援助が必要なのかを考えていくことが大切である。そこで、幼児の育ちの節目と遊びとの関連性、自然環境との関わりをまとめた年間指導計画を作成した(表3)。年間指導計画においては、自然環境との関わりについて太枠で囲っており、遊びの中に取り入れて保育実践を行う。また、自然環境との関わりだけに視点をあてるのではなく、目の前の幼児の育ちと遊びの様子とを照らし合わせながら、本研究と保育実践を進めていきたいと考える。そのため、園庭環境に限定せず、幼児の遊び、興味や関心の様子を捉えながら、室内の遊びや環境との繋がりを大切に、研究を進めいく。

表3 自然環境と遊びの年間指導計画(令和元年度普天間幼稚園年間指導計画を参考に筆者作成)

期	第Ⅰ期 (4～5月)	第Ⅱ期 (6～8月)	第Ⅲ期 (9～10月)	第Ⅳ期 (11月～12月)	第Ⅴ期 (1～3月)
育ちの節目	【新しい生活の始まり】 教師との関わりの中で安定していく時期	【友達と一緒に楽しい】 友達と関わりながら遊びを楽しむ時期	【それぞれの力を出し合って】 友達とのつながりができ、共に思いや考えを出し合いながら遊びを楽しむ時期	【充実した園生活】 友達とのつながりを深めながら、自己の力を発揮していく時期	【みんなの力を合わせて創り出す生活】 目的を持って、園生活を進め、深める時期
幼児の姿	・好きな遊びを楽しむ姿が見られるが、友達とのはっきりしたつながりはない。 ・教師とのつながりをよりどころにしている。	・気の合う友達ができ、一緒に好きな遊びを楽しむ姿が見られる。 ・身近な虫や草花に興味や関心を示し、観察したり育てようとする。	・夏休みやこれまでの経験を遊びに取り入れながら遊びを楽しむ。 ・試したり、挑戦したりしながら色々な遊びを友達と一緒に楽しんでいる。	・友達同士、考えやイメージを出し合いながら相手を受け入れて遊びを進めていく。 ・試したり、工夫したりしながら繰り返し挑戦している。	・互いの良さを認め合い、役割分担しながら意欲的に生活を進めていこうとする。 ・就学を意識し、仲間関係にまとまりが見られ、自信をもって行動している。
ねらい・内容	◎園生活に親しみ、喜んで登園する。 ・教師や友達に親しみをもつ。 ・好きな遊びを見つけ、楽しむ。	◎好きな遊びを見つけ、友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わう。 ・遊びを通して友達と触れあい、親しみをもつ。 ・園の自然環境に関心をもち、関わって遊ぶ。	◎友達と力を出し合い、試したり、工夫したりして遊ぶ。 ・感じたこと、考えたことを伝え合いながら遊ぶ。 ・身近な自然物を遊びに取り入れて遊ぶ。	◎友達とイメージを伝え合い、共通の目的や目標をもって遊びを進める楽しさを味わう。 ・友達と一緒に思いや考えを伝え合い、共通のイメージをもって、遊びを進めていく。	◎互いの良さを認め合い、友達との繋がりを深めながら、自分達で園生活を進める。 ・就学へ期待をもつ。 ・友達と相談しながら園生活を進めていく充実感を味わう。
幼児の遊び	パズル、粘土遊び、ブロック、絵描き、固定遊具、砂遊び、木登り、草花摘み、虫捕りなど	粘土遊び、制作遊び、折り紙(紙飛行機等)、色水遊び、石鹸遊び、シャボン玉、虫捕り、砂遊び、水遊びなど	ごっこ遊び(鬼ごっこ、キャンプ、エイサーなど)、リズム遊び、運動遊び(フラフープ、竹馬、長縄)など	運動遊び(鉄棒、竹馬、ホッピング)虫捕り、ごっこ遊び(お店屋さん)制作遊び(自然物を使って)、サッカーなど	劇遊び、リズム・楽器遊び、文字・言葉遊び(カルタ、すごろく、郵便ごっこなど)、コマ回し、凧揚げ、ドッジボールなど
植物・栽培物	◎触れあって遊ぶ ・シロツメクサ ・ムラサキカタバミ ・桑の実・月桃 ◎種まき、生長を楽しみにする ・アサガオ ・二十日ネギ	◎生長に関心をもつ ◎夏野菜を収穫し、食べる ・おくら・ナス ・ゴーヤー・ピーマン ・トマト ・きゅうり	◎遊びに取り入れる ・マツバボタン ・トレンシア・桑の実 ・ホウセンカ ・センダン草 ・オシロイバナ	◎秋の自然を感じる ・落ち葉・マツボックリ ・モモタマナ・コスモス ・芋掘り遠足 ◎収穫を楽しみにする ・種ジャガイモ植え	◎野菜を収穫し、食べる ・ジャガイモ ・ニンジン ・ホウレン草 ・ブロッコリー ◎チューリップを育てる
虫・生き物	◎身近な生き物に愛着や関心をもって関わる ・テントウムシ・ダンゴムシ・アリ ・カタツムリ ・ミミズ ・シャクトリ虫 ・ザリガニ	◎身近な生き物の理解を深める ・セミ(抜け殻) ・カエル ・幼虫～さなぎ～成虫へ(蝶) ・スズメガ カバマダラ ツマグロヒョウモン オオゴマダラ	◎秋の訪れを感じる ・トンボ ・コオロギ ・バッタ ・カマキリ	◎身近な生き物の世話をしようとする ・グッピー ・金魚 ・エビ ・ミミズ ・カナブンの幼虫 ・ミノムシ	◎冬への自然への関心 ・気温 ・風 ◎春の訪れを感じる ・気温の変化 ・日差し
自然現象 自然物	◎季節の変化を感じる ・梅雨 ・雨の散歩 ◎初夏の自然を感じる ・風・空・日差し・衣替え ◎試したり工夫したりして遊ぶ面白さを感じる ・色水遊び・シャボン玉・石鹸遊び	◎夏の自然への関心を高める ・水遊び、プール	◎天気や気象に興味をもつ ・晴れ・雨・台風・虹 ◎身近な自然物を取り入れて遊ぶ ・石・泥・砂 ・落ち葉 ・木の実 ・木の枝	◎秋を感じる ・気温の変化 ・空 ・雲	◎冬への自然への関心 ・気温 ・風 ◎春の訪れを感じる ・気温の変化 ・日差し
教師の援助と環境構成	・安心して園生活を送ることが出来るよう、一人一人の様子を見ながら共に遊んだり、寄り添ったりと個々に合わせた配慮を行う。 ・これまでの経験したことのある遊び、興味や関心のある遊びを用意し、安心感を持てるようにする。 ・温かく受け入れる中で、保護者との連携を取り、幼児理解を図る。	・自分のしたい遊びを見つけ、取り組めるように様子を見ながら必要な材料や遊具を準備し、一緒に考えていく。 ・触れあい遊びを通して、友達と関わって遊ぶ楽しさを味わえるようにする。 ・身近な生き物や植物に興味や関心を持つよう、教師も共に世話をしたり関わっていく。 ・砂や泥、水の感触や気持ちよさが十分に味わえるよう、教師も共に遊びを楽しむ。	・発見や驚き、感動を教師や友達と共感しあう中で、刺激を受け、友達と一緒にアイデアや考えを出し合い遊びを進めていけるようにする。 ・身近な自然物(落ち葉、草花、枝、実、石など)と触れあい、遊びの中に取り入れ楽しむことができるよう、幼児の遊びの様子やタイミングを見ながら、教師もアイデアを出したり、一緒に考えたりする。	・友達とイメージを共有し、遊びを広げて楽しめるよう材料・道具を提案し、一緒に準備をしていく中で主体的に進めていけるように配慮する。 ・自分なりの目標を持って頑張る姿を認め、励ましたりし、それぞれの喜びや悔しさ等の気持ちを共有する。 ・協力し合って遊ぶ中で、決まりやルールを考えたり、幼児なりの工夫を認め、援助していく。	・自分達で生活を進めていこうとする姿や目的に向かって取り組む姿を認めながら、必要に応じて援助したり、友達やクラスのつながりを十分に感じられるよう援助し、教師も一緒に楽しみながら共に取り組む。 ・北風の強い日や暖かい日など、生活の中で服装や季節の変化にも気づかせていく。 ・これまでの園生活を振り返り、成長を確かめ合い、自信や意欲、就学への喜びや期待へと繋いでいく。

IV 検証保育

検証保育指導案

令和元年12月18日(水)
男児16名 女児14名 計30名
保育者 高江洲 さくら
指導助言者 岡花 祈一郎

- 1 主な活動名 友達と一緒に意欲的に好きな遊びを楽しもう
- 2 ねらい ○友達と一緒に試したり，工夫したりしながら意欲的に遊びを楽しむ。
- 3 内容
 - ・身近な自然物を遊びに取り入れて遊ぶ。
 - ・友達と相談したり考えたりしながら，繰り返し取り組んでいく。

4 活動設定の理由

これまで、幼稚園での日常的な遊びや活動の中で、園庭の身近な自然環境に幼児が興味や関心をもって関わる姿が見られている。遊びの様子を見てみると、興味や関心はあるが、友達の様子を見ているだけだったり、すぐに別の遊びに移ってしまう姿が見られた。その様子から教師の願いとして、興味や関心から試行錯誤を繰り返し、友達との関わりを通してさらに好奇心や探究心を育み、意欲的に遊んでほしいと感じた。

そこで、身近な自然環境を活かした遊びを通して、教師が言葉かけや適切な援助の工夫を行うことで、幼児は試したり工夫したりしながら遊ぶ楽しさを味わうのではないかと考える。遊びや活動の中で感じたことや考えたことを伝えあい、友達の考えに触れる場や機会をもつことで、さらに友達同士の関わりや遊びの繋がりができ、意欲的に遊ぶことへ繋がると考え、本活動を設定した。

(1) 教材観

本時の好きな遊びの中で、五感を通して自然環境や自然の不思議さに触れ、「おもしろそう」「なぜだろう」といった幼児からの問いが生まれるよう、五感を刺激する教材(自然物)を遊びの中に取り入れ活かしていく。これまでの検証保育の中でも、雨天時に雨水に興味をもち、樋で流して遊んだり、集めた雨水で氷づくりをする姿が見られる。そのため、雨水集めや氷づくりなどの遊びの中で、草花や木の実、砂、泥などの自然物を取り入れながら遊ぶことは、繰り返し試したり工夫したりして、好奇心や探究心を刺激していくには、効果的な教材である。

(2) 幼児観

これまで遊びの中で、木登りや虫捕り、色水づくりなど自然と関わって遊ぶ姿が見られてきた。また、9月頃からは友達との関わりも深まり始め、友達と一緒に遊びを楽しんだり、活動を進めていこうとする姿も見られるようになってきた。検証保育期間の中でも、友達の思いに「私もそう思う」「一緒にやりたいな」と共感したり、共に過ごしていきたいという気持ちや様子が見られている。時には友達との関わりの中で、互いの思いや考えが受け入れられずに言い合いになってしまうこともあるが、子ども達の成長の過程において大切な経験であり、関わりが深まる通過点であると捉える。

(3) 指導観

幼児が遊ぶ様子を見守りながら、十分に遊びを楽しむことができるよう共に考えたり試したりしながら、教師自身も遊びを楽しむ中でタイミングを図り、問いが生まれる言葉かけなど援助を行っていく。また、様々な材料や道具を使って試したり工夫したりしながら、遊びを繰り返し楽しむことができるよう事前に教材準備を行う。さらに、十分に繰り返し取り組んで遊ぶことができる場や時間の確保を行うことを大切に、保育実践していく。

(4) 活動計画

	日程	○ねらい・内容	◎教師の援助 ☆環境構成
1	6～7月	○好きな遊びを見つけて友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わう。 ・遊びを通して友達と触れ合い、親しみを持つ。 ・園の自然に関心をもち関わって遊ぶ。	☆自分のしたい遊びを見つけ、取り組めるように様子を見ながら必要な材料や遊具を準備する。 ◎身近な生き物や植物に興味や関心がもてるよう、教師も共に触れあい、世話をして関わっていく。
2	9～11月	○教師や友達と一緒に、試したり、工夫したりして遊ぶ楽しさを味わう。 ○友達とイメージを伝え合って遊ぶ楽しさを味わう。 ・感じたこと、考えたことを伝え合いながら遊ぶ。 ・自然物を遊びに取り入れて遊ぶ。	◎発見や驚き、感動を教師や友達と共感しあう中で、刺激を受け、友達と一緒にアイデアや考えを出し合いながら遊びが進めていけるようにする。 ☆疑問がでた時に幼児自身が調べることができるよう図鑑や絵本を準備する。 ◎友達とイメージを共有し、遊びを広げて楽しめるよう材料・道具を提案し、一緒に準備をしていく中で主体的に進めていけるように配慮する。
3	12/6 (金)	○身近な自然物に触れ、遊びの中に取り入れて遊ぶ楽しさを味わう。 ・見たり、触れたり、臭いをかいだりと五感を使って遊びを楽しむ。	◎幼児の感動や気づきを受け止め、共感していく。 ◎遊びの振り返りの場では、教師が遊びの様子をわかりやすく伝えたり、頑張りを認めたりし、次の遊びへと繋がるように話し方を工夫する。
4	12/9 (月)		☆遊びの中で身近な自然と触れあい、五感を使って遊びを楽しむことができるよう、園庭の環境や自然物の展示の仕方を工夫する。
5	12/10 (火)	○試したり、工夫したりしながら遊びを楽しむ。 ・友達と相談したり、考えたりしながら、繰り返し取り組んでいく。	◎遊ぶ様子を見守りながら、タイミングをみて疑問や気づきが生まれるような言葉かけを行う。 ◎遊びの振り返りの場では、友達の遊びの様子や考えに触れ、新たな気づきや遊びへの期待や意欲がもてるよう、幼児同士の繋がりを意識した援助を行う。
6	12/11 (水)		☆幼児の興味や関心を捉え、繰り返し試行錯誤しながら取り組めるような材料・道具の準備を行う。
7	12/12 (木)	○思いやアイデアを出し合い、相談しながら遊びを進める楽しさを味わう。 ・感じたこと、考えたことを伝え合いながら遊ぶ。	◎幼児の思いや考えを受け止めながら、幼児同士の思いや考えをわかりやすい言葉で伝えたり、共に状況や遊びの方向を整理する援助をしながら進めていく。
8	12/13 (金)	・身近な自然物を遊びに取り入れて遊ぶ。	◎遊びの振り返りの場では、友達の遊びの様子や考えに触れ、新たな気づきや遊びへの期待や意欲がもてるよう、幼児同士の繋がりを意識した援助を行う。
9	12/17 (火)		☆幼児の興味や関心を捉え、繰り返し試行錯誤しながら取り組めるような材料・道具の準備を行う。
10 本時 公開 保育	12/18 (水)	○友達と一緒に試したり、工夫したりしながら意欲的に遊びを楽しむ。 ・身近な自然物を遊びに取り入れて遊ぶ。 ・友達と相談したり考えたりしながら、繰り返し取り組んでいく。	◎友達同士遊ぶ様子を見守りながら、幼児の思いや考え気づきなどを共感したり、友達へと共有し繋げていく援助を行い、教師も共に遊びを楽しむ。 ◎それぞれの遊びの様子の過程を大切に援助していく。 ◎遊びの振り返りの場では、友達の遊びの様子や考えに触れ、新たな気づきや遊びへの期待や意欲がもてるよう、幼児同士の繋がりを意識した援助を行う。 ☆幼児の興味や関心を捉え、繰り返し試行錯誤しながら取り組めるような材料・道具の準備を行う。
11	12/19 (木)	○友達と一緒に試したり、工夫したりしながら意欲的に遊びを楽しむ。 ・感じたことや考えたことを伝え合いながら遊びを進めていく。	◎それぞれの遊びの様子の過程を大切に援助していく。 ◎遊びの振り返りの場では、友達の遊びの様子や考えに触れ、新たな気づきや遊びへの期待や意欲がもてるよう、幼児同士の繋がりを意識した援助を行う。

(5) 本時の指導案

指導案 令和元年12月18日(水)		年長ゆり組 男児16名 女児14名 計30名 保育者:高江洲さくら	
＜主な活動名＞ 友達と一緒に意欲的に好きな遊びを楽しもう			
研究仮説	幼児が教師や友達と一緒に身近な自然環境を活かした遊びを通して、様々な経験を重ねていく中で、教師が幼児の気持ちに共感し楽しさを共有する援助の工夫を行うことで、好奇心や探究心が生まれ、意欲的に友達や自然環境と関わって遊びを楽しむようになるであろう。		
ねらい	○友達と一緒に試したり、工夫したりしながら意欲的に遊びを楽しむ。	内容	・身近な自然物を遊びに取り入れて遊ぶ。 ・友達と相談したり考えたりしながら、繰り返し取り組んでいく。
時間	・予想される幼児の姿	◎教師の援助 ☆環境構成	評価項目(幼児の姿)
8:15	＜登園＞ ・朝の挨拶をする。 ・所持品の始末をする。 ・出席ノートにシールを貼る。	☆クラスの窓を開け、換気を行い、安全確認など迎え入れる準備をする。 ◎元気よく挨拶をし、一人一人を笑顔で温かく迎え入れながら健康状態を把握する。(視診)	○期待をもち、喜んで登園しているか。
8:20	＜朝の活動＞ ・草花への水やりをする。 ・園庭清掃(落ち葉拾い、ゴミ拾いなど)をする。 ＜自ら選んで行う好きな遊び＞ 【戸外】 砂遊び、木登り、ターザンロープ、鉄棒、鬼ごっこ、サッカー、竹馬、長縄、フラフープ、桶を使って遊ぶ 草花で遊ぶ、泥団子づくり、ままごと、氷づくり、しずく集め 【室内・ホール】 製作遊び(松ぼっくりなどの自然物を使って)、折り紙遊び、ままごと、発表会ごっこ(エイサー、リズム遊び、運動遊びなど) ※雨天時は室内遊びのみ	◎所持品の始末を忘れがちに子に声をかけ、必要に応じて援助する。 ◎教師も子どもたちと一緒に園庭清掃をしながら、植物の生長や変化などの気づきを受け止めたり、共感する。 ☆遊びを十分に楽しめるよう、遊びに使う道具や材料を準備しておき、必要に応じて子ども達が自分で出して使ったり片付けたりしやすいように表示しておく。 ◎友達と思いや考えを出し合いながら遊んでいる様子を見守り、より楽しくなるように子どもと必要な物を探したり、アイデアを出したりする。 ◎友達と思いや考えを出し合う中で、言い合いやけんかになってしまう場合は、教師も共に状況整理をしたり、互いの気持ちを言葉にして伝えたりと思いを受け入れ合えるよう援助していく。 ◎子どもの気づきや発見を受け止め大切にしながら、試したり工夫したりできるようタイミングを見ながら言葉かけを行う。 ☆幼児が目で見ても片付けしやすいように工夫する。(絵や文字での表示、片付けの動線など)	
10:00	＜片付け＞ ・使った道具、遊具を片付ける。 ・手洗い、排泄をする。 ・必要に応じて着替える。	◎教師も一緒に片付けをしながら、子ども達の頑張る様子を認めたり励ましたりし、片付けの気持ちよさが味わえるようにする。	
10:30	＜朝のひととき＞ ・歌を歌ったり、手遊びをする。(焼きいもグーチーパー、赤鼻のトナカイ) ・出席状況を確認する。 ＜遊びの振り返り＞ ・今日の遊びを振り返り、楽しかったことや発見したことなどを伝えあう。	◎クラスみんなで一緒に歌ったり手遊びをして過ごす楽しさを味わい、仲間意識や繋がりが感じられるようにする。 ◎遊びの振り返りの中で、友達の考えや思いに触れることができるよう、話し方や場の持ち方を工夫する。 ◎今日の遊びやできごとを振り返り、一人一人の思いを受け止めながら、明日への遊びに期待がつかれるよう配慮する。	○友達と思いや考えを出し合いながら遊ぶ楽しさを味わっているか。 ○試行錯誤しながら繰り返し遊びを楽しんでいるか。
評価の観点	・幼児と共に、教師自身も楽しんで遊びや活動に取り組んでいたか。 ・幼児の思いや気づきを受け止め、さらに試したり工夫したりしながら意欲的に遊べるような言葉かけや援助を行うことができていたか。 ・幼児が継続して遊びに取り組める場や時間の確保は十分であったか。		

(6) 教師の援助の工夫 ～自然環境と遊びをつなぐ環境構成を通して～

12月の検証保育に入る前に、子ども達の遊びの様子や興味関心と照らし合わせながら、再度園庭環境の見直しを行った。

場所	環境構成の工夫	・教師の意図 ◎子どもの姿、変容
①土山	<p>・平たんだった土山に、赤土を足した。</p> 	<p>・土や泥の感触を十分に楽しみながら、泥団子作りなど泥を使った遊びを楽しんでほしい。</p> <p>◎初めは「この土ふわふわだよ」「さわってみて」と友達同士、土の感触を楽しんで遊ぶ姿が見られた。</p> <p>◎泥団子作りや泥を固めて、泥のトンネル作りをして遊ぶを楽しんでいる。その中で、手で土を固めたり、トンネルに水を溜めるために工夫する姿が見られた。</p>
②花壇 ・畑	<p>・季節や五感を刺激する草花や栽培物の配置を行う。</p> 	<p>・身近な自然環境に触れあったり、自然物を遊びに取り入れて遊ぶことができるよう、季節に合わせた草花や栽培物を配置した環境構成を行う。</p> <p>・草花のネームプレートを作成し、文字環境に触れると共に、草花に興味や関心が深まるようにする。</p> <p>◎遊びに合わせて匂いのする葉っぱや木の実などの自然物を使い、遊びに取り入れて楽しむ姿が見られる。</p>
③道具 ・材料	<p>・試したり工夫ながら遊びを楽しめるよう、幼児の遊びの様子を見ながら、様々な道具や材料を準備する。</p> 	<p>・遊びの様子に合わせてその都度材料や道具の数、配置場所など、遊びの動線を考え再構成していく。</p> <p>◎幼児の興味や関心、遊びの様子から必要な材料や道具を準備し、タイミングをみて出していくことで、一つの遊びから、色々なアイデアが生まれ、さらに別の遊びへと繋がっていく姿が見られた。また、教師も共に遊びに入り、考えていくことで必要な道具を自分達で考え、準備しようとする姿も見られた。</p>
④ホール	<p>・室内にも自然との繋がりが持てるよう、自然物を準備する。</p> 	<p>・室内での遊びにも繋がりがもてるよう、室内にも自然物を用意し、制作などの遊びに取り入れられるようにした。また、見たり触ったり臭いをかいだり五感を刺激できるような展示の工夫を行った。</p> <p>◎松ぼっくりや落ち葉、木の枝などの自然物を使い、クリスマスツリーや動物に見立てるなどの制作をそれぞれのイメージで楽しむ姿が見られるようになった。</p>

5 検証保育研究会

(1) 保育者の反省

- ・雨天のため、思い思いにしずく（雨水）と関わって遊びを楽しむ姿が見られた。教師もその姿を見届け受け止めたり、発問を投げかけたりする援助を意識して行った。その結果、子ども達はそれぞれの方法でしずく集めを楽しんだり、試したり工夫したりしながら、氷づくりや雨水を流したりと遊びを繰り返して楽しむ姿や遊びの広がりも見られた。
- ・子ども達一人一人の気づきを受け止め、問いをもたせることはできた。しかし、友達同士の関わりや繋がりをもちたせる言葉かけや発問の工夫が不十分であり、上手く子ども達同士の関わりを繋げることができなかった。
- ・遊びの振り返りの際に、教師の話し方や場の持ち方の工夫が必要である。楽しく参加し、話を聞きたくなるような工夫を行っていく必要がある。

(2) 指導助言（琉球大学准教授 岡花 祈一郎）

- ・遊びの中で「ラムネソーダみたい」と見立てる、「石鹸入ると色が変わったね」と変化への気づき、「しずくって凍るかな」と疑問をもつ様子が見られた。

- ・様々な方法でしずくを集める子ども達の様子が見られた。子ども一人一人アプローチの仕方が違う面白さがある。そのため、子ども一人一人の試行錯誤する様子や気づきを拾うと良い。
- ・しずく集めから色水づくり、泡づくり、氷づくりへと遊びの繋がりも見られた。子どもそれぞれのアイデアを次の発展へと繋ぐことが大切である。（教師の発言で子ども達の遊びが広がる様子から、教師の言葉かけが重要であると感じた。）
- ・教師の手立てとして、雨天時や子どもの様子に合わせた環境構成の工夫が見られ良かった。また、「すごい発見だね」「しずくって素敵な音になるね」と発見を認める、注意を向ける、発問する言葉かけの工夫が見られた。これらの援助が遊びに影響を与えるため、もっと教師からの問いかけがあった方が良い。
- ・集団での遊びの発展が少なかった。「〇〇さんはどう思う？」と子どもの気づきや仮説をもとに、幼児同士の関わりや次の遊びへと繋げ、実践していくことが大切である。
- ・その日の遊びの様子をテレビ画面に映し写真で振り返ることでイメージしやすく全体で共有する手立てとして良い。また、ドキュメンテーションを活用して子ども達に遊びの繋がりを可視化し、わかりやすくする工夫も見られ良かった。遊びの振り返りの場では、楽しい雰囲気に参加できる工夫や全体で話す時の話し方を子ども達と確認していく必要がある。

V 検証の方法と手続き

1 幼児理解の方法について

幼児理解を深めるためには保育の振り返りや記録が重要である。日々の保育を振り返り、個々の幼児の心の動きや育ちを理解することでよりよい保育へと繋げていく。よって、検証保育においても保育や幼児の育ちの筆記記録を基本に、写真やビデオ等で記録に残していく。また、教師間の情報交換、共通理解など多様な視点で振り返ることが、幼児理解を深めていく上で大切であることを踏まえ、実践していく。幼児理解の方法としてエピソード記述（表4）を用いて、幼児の心の動きを捉え、個々の幼児理解を深めながら援助の工夫を行っていく。

さらに、幼児理解の方法として幼児の遊びの様子を可視化し、幼児と周りの環境を繋いでいく援助の工夫としてドキュメンテーション（表5）の作成、活用を行う。

表4 エピソード記述(森上史朗他(2015), 鯨岡峻他(2009)参考)

ある特定の具体的な場面を、そこに関係する人物の行動やかかわりの展開に留意して、できるだけ詳しく記述したもの。現場の中で立ち上がる問いについて、その問いとの関連のなかで、その現象の何らかの「意味」が見えてきたときに浮かび上がり、描きだされるものとされている。保育実践から立ち上がる様々な問題について、その本質に接近していくための質的研究の資源の一つとなるものである。「思いを受け止め、思いを返す」という目には見えない子どもと保育者の心の動きをエピソードで描き、共有していくことが大切である。

表5 ドキュメンテーション(幼児学用語集 小田豊他(2013)参考)

保育の場面において幼児の発言をメモしたり、幼児の活動の様子をカメラやビデオで撮影し、作成された記録物こそがドキュメンテーションである。その役割は、単に保育の現実や幼児の心情を理解するだけでなく、今の保育をさらに発展させたり、以前の状況に立ち戻らせたりするための解釈を促す。ドキュメンテーションは、幼児の活動の経緯、思考の過程、知識構築の道筋などを明示してくれることから、保育者と幼児の思考と活動の軌跡を映し出す「鏡」として捉えることができる。

2 評価の視点について

検証保育の評価では、幼児の好奇心や探究心が育まれる過程に視点をあてていく。

幼児が試行錯誤しながら遊びを楽しむ様子を捉え、その中で誰とどこでどのように遊びを進めているのか観察し、記録していく。記録をもとに、幼児が教師や友達と関わる様子、遊びの中で試行錯誤する過程の様子を踏まえ、幼児の好奇心や探究心の育ちを捉えていく。

そのため、友達と意欲的に遊ぶ姿を大切に、その遊びの中でどのような過程を踏んでいるのか、そのプロセスに視点をあてて育ちを捉え、評価の視点とする。

3 幼児の実態把握について

事前に保護者へと行ったアンケート調査(令和元年 11 月実施)の結果から、幼稚園入園前よりも入園後は、室内戸外、両方同じ程度で遊ぶ割合が全体の約 2 割増えており、年齢と共に家庭でも戸外で遊ぶ機会が増えてくると考えられる。また、入園後は、家庭でも戸外で虫捕りをして遊ぶ割合が入園前より約 1 割増えており、園での遊びの様子が家庭の遊びへと影響し、繋がっていると考えられる。これらの結果から、幼稚園での身近な自然と関わって遊ぶ機会を大切に、家庭との連携を図りながら研究実践へと活かしていきたい。

VI 仮説の検証

研究仮説

幼児が教師や友達と一緒に身近な自然環境を活かした遊びを通して、様々な経験を重ねていく中で、教師が幼児の気持ちに共感し楽しさを共有する援助の工夫を行うことで、好奇心や探究心が育まれ、意欲的に友達や自然環境と関わって遊びを楽しむようになるであろう。

1 保育の振り返りとエピソード記述から幼児の姿を捉える

研究テーマに基づいた保育実践を行い、保育の振り返りやビデオ記録、エピソード記述を通して幼児の姿や変容をもとに検証を行う。その対象を「クラス全体」と「抽出児H」とする。

「抽出児H」に関しては、身近な自然への関わりを通して遊びへの意欲が高まった様子から、変容が見られた最適な幼児だと捉え、検証の対象とする。

身近な自然と関わりながら遊ぶ中で、幼児が教師や友達と関わる様子や試行錯誤する過程の様子を踏まえ、幼児の好奇心や探究心の育ちに視点をあてる。また、研究仮説に基づく教師の援助の工夫を通して、検証の効果性や幼児の変容を捉えていく。教師による援助の工夫を波線「~~~~~」、幼児の心の動きや変容を二重線「====」, 反省や課題を「.....」で示す。

子ども達の検証前の様子	教師の願い
<p>クラス全体 ゆり組は、進級児 12 名、保育園より入園 14 名、初めての集団保育 2 名、途中転入 2 名の計 30 名年長クラスである。子ども達は戸外遊びを好み、園庭にある草花の観察をしたり、蝶やバッタなどの虫捕りをしたりなど、自然環境に興味を持って関わって遊ぶ姿も多く見られた。その一方で、自然に興味や関心が低く、室内遊びを好み、砂や泥、生き物などに触れることに苦手意識のある子もいた。また、遊びが続かずに途中でやめてしまったりと、遊びが継続しない。興味や関心をもって自分から積極的に関わり、試行錯誤しながら遊ぶ姿が見られず、意欲的に遊びに参加できていない子が数名見られている。</p>	<p>子ども達は、それぞれ遊びを楽しむ姿は見られるが、友達の興味や関心に対して共感し、刺激を受け合って主体的に遊びを進めていこうとする姿が見られず、日頃から意欲をもって遊びを楽しんでほしい。</p>
<p>抽出児H 4月に保育園から入園した女児。入園当初は、慣れない環境に緊張した様子が見られた。優しい性格であり、自分の思いを我慢し、教師や友達に伝えられずに泣き出してしまうこともあった。また、1学期は教師の傍で、遊びの手順などを確認しながら遊ぶことも多かった。2学期からは気の合う友達との関わりを楽しみながら遊ぶ姿が見られるようになってきた。虫などの生き物に興味はあるが、触ることに対しては緊張したり、驚いたりする反応が見られた。砂遊びや色水づくりなど自然と関わって遊ぶことを好んでいる。</p>	<p>友達との関わりを楽しみながら、自信をもって積極的に遊びに取り組んでほしい。また、自然を遊びの中に取り入れて、試したり工夫したりしながら遊ぶ楽しさを十分に味わってほしい。</p>

蝶の幼虫との出会い

クラス全体 抽出児H

《背景》

入園から2カ月が過ぎ、少しずつ園生活の流れにも慣れはじめた頃である。自ら選ぶ好きな遊びの際には、四葉のクローバーを探したり、木登りをして桑の実をとって食べたりと自然に関わって遊びを楽しむ子の姿が見られている。

その一方で室内遊びを好み、自然に触れあって遊ぶことに苦手意識をもっている子の姿も見られた。

《エピソード》

朝の活動で草花に水やりをする際に、園庭に咲いているパンジーやスマイルの葉にツマグロヒョウモンという蝶の幼虫がついているのを教師が発見し、「みてみて～あおむしがいるよ」と傍にいた子ども達数名へと伝えた。「どこどこ？」と興味はあるが、幼虫の見た目は黒くて赤色の線が入っており、毛が生えていることから「先生、これ毛虫じゃない？」

「ぶつぶつなっちゃうよ」「きもちわるい～」と否定的な反応が多く見られた。その様子から、見た目だけで決めるのではなく、様々な虫や生き物に触れあってほしいという教師の願いから、「これはね、蝶の幼虫で触っても大丈夫なんだよ、ほら」と手の平に乗せてみせた。すると、「きゃーいやだー」「先生怖くないの？」と様々な反応が見られた。

初めは見た目から、気持ち悪がっていた子が多かったが、教師が手の平に乗せる姿を見て「Hもやってみたい！」と抽出児Hが手を出してきた。

教師が幼虫を手の平に乗せてあげると「きゃ！」と感触が伝わらずがゆかったのか手を離して落としてしまった。その様子をたまたま通りかかったM児が見ており、「これはツマグロヒョウモンっていう蝶の幼虫だから、毒はないんだよ。触っても大丈夫だよ」と教師や友達に教えてくれた。

そこから、「やってみたい！」と数名の子が手に幼虫を乗せ、手の平を歩く姿を眺め、「かわいいね」と観察する姿が見られた。



写真1 幼虫を手に乗せる子ども達の様子

《考察》

入園してから、虫捕りや草花集めなど、園庭の自然と触れあい、興味をもって遊ぶ姿が見られた。自然に興味をもっている姿を捉え、教師が幼児と共に自然と触れあって遊ぶことで、さらに興味や関心をもつきっかけになってほしいという教師の願いから、教師が率先して遊びの中で自然との触れあいを行った。最初は虫に触れることに否定的だったり、苦手意識をもっていた子も、教師の姿に刺激を受け、抽出児Hも、「やってみようかな」と幼虫に対する気持ちの変化が見られた。教師の自然に関わる姿勢が、モデルとしての大切な役割であり、自然との出会いのきっかけとなる重要な役割となる。引き続き、幼児一人一人の気持ちに寄り添いながら、まずは安心感をもって園生活を過ごし、さらに自然環境との関わりを楽しめるような援助を行うことで、自然と関わって遊ぶ楽しさを味わってほしいと願う。

お茶づくり(色水遊び)

クラス全体 抽出児H

《背景》

園庭では桑の実がなったり、モモタマナやガジュマルの木の落ち葉や木の実を集めて、大きさや色の違いを友達と比べて楽しんでいる。また、運動会を経験し、友達との繋がりも少しずつできはじめている。そのため、遊びの中でのできごとや発見したことを教師や友達に伝えたいという気持ちも強く、「これ、みんなに見せたいな」「帰りの集まりでみんなに話してもいい？」という発言も多く聞かれている。

《エピソード》

朝の活動の際に集めた落ち葉や木の実を使い、お茶に見立てた色水づくりが始まった。すり鉢やすりこぎを使って落ち葉や木の実をつぶして水を混ぜ、お茶をつくる。初めは落ち葉でつくっていたが、次第に園庭に咲いている草花を集めて色々な草花を使ってお茶づくりを楽しんでいる。できあがったお茶の色を比べたり、匂いを嗅いだりしている。

中でも、ヘクソカズラの実をつぶしてつくったお茶からは、強烈な匂いがする。それを嗅いだ子ども達は「くさ～い」「うんこの色みたい」「もう一回」と匂いを嗅いで「くさ～い」と友達同士繰り返し匂いを確かめ合っている。

一緒にお茶づくりをしていた抽出児Hは「他のお茶と混ぜたらいい匂いになるんじゃない」と気づき、早速色々なお茶と混ぜて匂いを嗅いでみる。その後、お茶だけでなく色々な葉っぱや木の実と混ぜ合わせてみたり、繰り返し試したりする姿が見られた。

突然、抽出児Hが「匂いしてみても！砂を混ぜると匂いが消えるよ！」興奮しながら教えてくれた。教師と数名の子で匂いを嗅いでみると、確かにヘクソカズラの強烈な匂いが消えている。抽出児Hには自信をもって、積極的に遊びを楽しんでほしいという教師の願いから、Hの気持ちを受け止め、共感する言葉かけを行った。
「すごいねHさん大発見だ！」と伝えると、笑顔で「みんなにもおしえてくる！」と匂いの消えたお茶を片手に園庭にいる友達へと嬉しそうに伝えにいく姿が見られた。



写真2・3 お茶づくりを楽しむ子ども達の様子

《考察》

園庭の落ち葉や木の実の様子を見て、1学期にも経験した色水づくりの要領でお茶づくりを楽しむ子ども達。その様子から、経験した遊びをアレンジしたり、お茶という身近な飲み物をイメージしたりと遊びは生活や経験と深く繋がっているのだと改めて感じさせられた。偶然できた臭い匂いのお茶に子ども達は様々な反応を見せた。その中でも、抽出児Hの「どうしたら臭い匂いが消えるだろう」という疑問から、色々な方法を試して繰り返し取り組む姿が見られ、匂いが消える方法を発見した時にはとても嬉しそうな表情であった。
 抽出児Hは、優しい性格な分、時に自分の思いを我慢してしまうことがあった。発見したことを教師が共感し、認め、言葉で伝えたことで嬉しさや喜びをその場にいる幼児とも共有することができたと考える。
 抽出児Hには、今後も嬉しさや喜びを共感したり、友達と共有することで背中を押し、自信へと繋げていきたい。
 また、このできごとをクラス全体で共有する場が持てなかったことが反省である。今後の検証保育に向け、子ども達の発見を共有することで、他児の刺激となり、遊びを広げるきっかけづくりをしていきたい。

12月6日（検証場面③）

しずく集めの始まり

クラス全体 抽出児H

《背景》

教師が部屋で明日の遊びの準備をしていると、M児が「先生何しているの？」とたずねてきたので、教師は「ペットボルの準備をしているんだよ。」と答えた。さらに、「発表会、しずくちゃんの劇遊びするんだよね？明日の天気雨みたいだから、しずくちゃん集めてみない？どんな形しているんだろうね～」と投げかけると、「うん、やる！」と嬉しそうに返事をしてくれた。

《エピソード》

翌日、M児は登園すると早速「しずく集めてくる！」と園庭に出る。そのことを朝のひとときにクラス全員に伝えた。すると、「私もやりたい」と早速、数名の子がやりたがる。その中には抽出児Hの姿も見られた。
 園庭に出ると、初めは「どこにあるかな～」としずくを探している様子。辺りを見渡しながらM児が「いいところがあるよ」と友達に教えてくれた。見ると、ガジュマルの木に結んでいるターザンロープの縄から垂れる雨粒を集めている。その様子を見ていた他の子が、ヒントになりひらめいたようで、ブランコの柵についている雨粒を集め始めた。
 するとI児が「もっといいところがあるよ」とみんなに伝え、総合遊具のタイヤから垂れてくるたくさんの雨粒を集め始めた。初めは垂れてくるものだけを集めていたが、次第にタイヤを揺らして多くの雨粒が落ちてくることを発見する。
 そこに気づいた抽出児Hが「もっといいところがあるよ」と思い付き、走り出す。みんなもそれについていき、テントから垂れてくるしずくを集め始める。その中で、テントを揺らしたり、ほうきの柄でつついたり色々な方法を試す姿が見られた。その後も、しずくの形(丸い、涙型、細い、太い)などや色(透明、白、茶色)に気づき、友達同士比べ合ったりする姿が見られ、次々に新しい発見を楽しむ子ども達の様子が見られた。
 また、しずくを集める際、ペットボルの口では小さく集めにくいことに気が付き、切って口を広げたり、多く集めるためにトイレットペーパーの芯をペットボルの口にかぶせたりと色々工夫する姿も見られた。



写真4・5 しずくを集める子ども達の様子

さらに、雨粒集めからI児が「泥団子の水に使いたい」と言い、泥団子をつくっていた。その他にも泥の道づくりや、氷づくりなどの遊びにも繋がっていく様子が見られ、しずく集めという一つの遊びから、様々な遊びへの気づきや発展性が見られた。

《考察》

本時はあいにくの雨天だったが、雨天という状況を活かした遊びはできないかと考えた。子ども達のこれまでの様子を見ていると、2学期からは雨や雲、虹などの気象にも興味があり、発表会に向けてしずくや虹をモチーフにした劇遊びをクラスで楽しんでいたので、遊びの中でも活かすことはできないかと考えた。教師が子ども達の興味や関心を捉え、しずく集めという遊びを投げかけたことによって、「しずくってどんな形かな」「しずくって色がついているのかな」と抽出児Hを含む子ども達は、問いをもってしずく集めを楽しむことができたと考える。また、しずく集めに必要なもの（ペットボトル、カップ、ボウル、バケツなど）を予め準備しておくことで、子ども達もスムーズに遊び始めることができた。そこから様々なものを使ってしずく集めを楽しむ姿が見られた。このことから、教師が幼児の興味や関心を捉え、それに合わせた環境構成の工夫（事前の準備）が大切だと考える。

さらに、「しずくってどんな形かな」と問いが生まれる教師の言葉かけの工夫によって、抽出児Hのしずくに対する興味や関心が深まり、様々な方法でしずく集めを試してみる姿が見られたと考える。

12月9・10・11日（検証場面④・⑤・⑥）

泥団子づくり（ドキュメンテーションを通じた遊びのつながり）

クラス全体

《背景》

土や泥の感触を十分に楽しみながら、泥を使った遊びを楽しんでほしいという教師の意図から平たんだった園庭の土山に、赤土を足した。初めは「この土ふわふわだよ」「さわってみて」と友達同士、土の感触を楽しんで遊ぶ姿が見られた。
次第に、数名の子ども達が泥団子づくりや泥のトンネルづくりが始まった。

《エピソード》

朝の活動時に「あつたー！雨に負けなかったー！」と泥遊びの痕跡が残っていることに喜ぶK児、Y児の姿が見られる。前日に砂場に隠した泥団子を堀探しながら、砂場で道をつくり、泥団子が転がる様子を楽しんでいた。

様子を見てみると、「ここはお家だよ」「ここはプールにしよう」と相談しながらつくる姿が見られる。また、泥団子を勢いよく転がしたり、転がした距離を競いたい時には、土山に泥団子を持っていき転がす姿が見られる。遊びによって場所の性質を使い分けしているように感じた。

好きな遊びの時間を終え、クラスで遊びの振り返りの場を設けた。その中で教師がその日に写した遊びの様子の写真（A4サイズの紙に印刷）を子ども達に見せながら遊びの様子を紹介した。泥団子づくりの工夫したところは「どんな風につくったのかみんなにも教えてくれる？」とK児にも声をかけ、みんなの前で発表してもらった。K児は少し照れながらも「砂の山の中に泥団子を埋めると強くなるよ」と話してくれた。

これらの子ども達の様子から、今日の遊びの様子を他児と共有したり、振り返る話題になったりと幼児同士の繋がりが生まれるきっかけとなつてほしいという教師の意図から、ドキュメンテーションの活用を行った。教師が今日の遊びの様子を写し、子ども達の気づきや様子を交えながらドキュメンテーションを作成し、クラスの入り口付近に掲示し、子ども達の目線からも遊びの様子や繋がりがわかりやすいように工夫した。翌日、子ども達は登園した後にドキュメンテーションの写真を見て思い出したかのように「今日は泥団子づくりする」「水づくりも楽しそう」と他児の遊びに刺激を受けたり、遊びを振り返る姿が見られた。



写真6 遊びの振り返りの様子



写真7・8 ドキュメンテーション



《考察》

もっと土や砂の感触を十分に味わいながら遊びを楽しんでほしいという教師の意図から、園庭の環境を見直し、赤土を足したことで、子ども達は土の感触を楽しんだり、性質にも気が付きながら泥団子づくりを楽しむ姿が見られるようになった。同じ遊びでも、少しの環境の違いや工夫で、子ども達が遊びに向かう気持ちや楽しさが大きく変わっていくことから、幼児の姿に合わせた環境構成の工夫は重要である。また、幼児に向けて遊びの様子をドキュメンテーションを作成し、遊びの様子や繋がりをわかりやすく可視化したことで、遊びに参加していなかった子が刺激を受け、遊びに参加して

みたりと、遊びの繋がりをつくることができた。遊びの継続性や広がりを生むことで、遊びの面白さをクラスで共有することができるよう、今後も遊びを共有する援助を意識して保育実践を行っていく。

12月12・13・17日（検証場面⑦・⑧・⑨）

氷づくり

クラス全体 抽出児H

《背景》

しずく集めをきっかけに、R児から、集めた雨水を凍らせて氷をつくってみたいとのアイデアが出た。R児の姿をきっかけに翌日から氷づくりをする子ども達の姿が多く見られるようになった。

《エピソード》

「もう固まったかな～」と前日に冷やした氷がどうなっているのか気にする子ども達の様子が見られた。凍った氷を見て、「冷たいね」「すべすべする～」との声が聞かれた。また、氷が固まった様子を見て抽出児Hは「溶けるのもったいないから冷やしてほしい」と溶けてなくなるのを惜しむ姿が見られた。もっと色々な氷をつくってみたいと、早速パックを準備し、園庭で草花や木の実などの自然物を探している。

E児が「先生、いいものがあるよ」と呼んでくれた先にはミントの葉っぱがある。教師が「ミントの葉っぱを入れるとミントの匂いがする氷になるのかな～」と言葉かけをすると「いいかも!」「もっと他にも匂いがするの入れたい」と園庭の草花を探し始める。教師が傍の花壇できれいに咲いていたニンニクカズラの花を紹介した。ニンニクカズラの花はきれいな紫色だが、その名の通り、ニンニクの強い匂いがする。その匂いを嗅いだ抽出児Hは、「そうだ! あっちにも臭い実があったよね」と思い出したようにヘクソカズラの実を取りに行く。ローズマリーやランタナなど匂いのする草花を探しながら、匂いの氷づくりを楽しんでいた。

翌日も遊びの時間になると氷づくりが見られる。太陽も出て暖かいこともあり、すぐに氷が溶けだした。

抽出児Hは氷が溶ける様子を観察して「泡が出ている」「音がなってるよ」との発見があった。今日はまだ氷づくりをやったことのない子が「やってみたい」と関わる姿が見られた。同じ遊びでも日によって氷の匂いに注目したり、氷が溶けていく様子を観察したりと様々な反応や姿があり幼児の遊びの面白さを感じた。

《考察》

しずく集めという遊びの中で、気温の寒さや「しずく冷たいね」と水の冷たさから、氷を連想し氷づくりへとつながっていったのだと推測される。

R児の氷づくりのアイデアを遊びの振り返りの場でクラス全体で紹介したことで、毎日多くの子が関わりながら氷づくりを楽しむ姿が見られ、遊びの様子を共有したことで遊びの広がりを実感した。

抽出児Hは、初めはできた氷が溶けるのを惜しがり、氷ができた様子を確認したら、すぐに冷凍庫へと戻していた。翌日からは、氷が溶けていく様子を観察したり、匂いのする氷づくりをする姿も見られた。

その中で、抽出児Hは氷が溶けていく時間を計ってみたり、草花の匂いは凍らせても消えないことなど様々な気づきや発見があり、それを楽しむ姿があった。教師の「こうしたらどうなるのかな」とタイミングをみながら問いをもたせる言葉かけをしたり、「こうしたらこうなったんだね」と幼児の気づきを言葉にして表現したりする援助が繰り返したり工夫したりし、気づきや発見することへと繋がったと考える。



写真9 自然物を使った氷づくり

12月18日（検証場面⑩）

しずく集め楽しいな

クラス全体

《背景》

先週から引き続き、毎日様々な子が関わりながら、草花や木の実、花を使った色水、泥などの自然物を使って、氷づくりを楽しむ姿が見られる。前日、M児がペチュニアの花を使って紫色の色水づくりをする様子を見た抽出児HやA児も、「やってみたい」と色水の氷づくりを楽しむ姿が見られた。

《エピソード》

雨天のため、好きな遊びの時間になると、すぐにペットボトルをもって園庭に出て、しずく集めをする姿が見られた。様子を見てみると、直接ペットボトルを空に向けてしずくを集めようとする子、頭にボウルを乗せてじっとしずくがたまるのを待っている子、地面にボウルを何個か置きしずくを集める子、天井から雨水がたくさん落ちてくる場所を見つけ、しずくを集める子など、しずくを集めるという一つの遊びに様々な方法で試す子どもの姿があり、個性が見られ面白い。

A児は氷づくりを楽しみながら、雨が降り出すとしずく集めも楽しんでいた。A児が「先生もしずく集めるの手伝って」と声をかけてきたので、一緒に計量カップを使ってしずくを集める。その中でA児が「しずくがびちゃって音がした」という発見があった。そのA児の様子を受け止め、「しずくって音がするんだね」

「他にどんな音がするかな」と問いを投げかけた。すると、R児も加わり「今度はちやんって音がした」と音の違いに気が付いたり、ボウルを使うと違う音がすることに気がつき、新しい発見に興奮している。

さらに、ペットボトルに貯めた雨水を傘に流したことをきっかけに、新たな遊びが始まる。

R児が「先生、すごい発見したよ！水を流したら（傘の柄の先端）ここからぴよんってとぶよ」としずくがはねることに気が付き興奮している。教師が「なんでとぶのかな～生きているのかな」と問いかけると「しずくがうごくからじゃない」と友達とその後もしずくを流しながら確かめる様子が見られた。



写真10 雨水を使って遊ぶ様子

《考察》

朝、カバンをもったまま、待ちきれずに遊びに参加する子の様子が見られ、遊びに期待をもち、意欲的に関わる姿が多く見られるようになってきた。遊びの継続性も見られるようになり、氷づくりやしずく集めなど、毎日様々な子が関わって遊びを楽しむ姿が見られている。また、「やってみたい」と友達との遊びの様子に刺激を受けて意欲的に遊びに向かう姿も多く見られるようになった。検証保育期間を通して、クラス全体で遊びの振り返りを行い、その中で友達との遊びの様子や友達の気づき、考えを知り、共有することによって遊びや友達同士の繋がりが生まれ、遊びの継続性へと繋がっていったと考える。

今日は雨天のため、思い思いにしずく（雨水）と関わって遊びを楽しむ姿が見られた。教師もその姿を受け止めたり、発問を投げかけたりと援助を意識して行った。一人一人の気づきを受け止め、問いをもたせることはできたが、友達同士の関わりや繋がりを促す言葉かけや発問の工夫が弱く、繋げることができなかった。振り返りの場や、ドキュメンテーションでの繋がりを促す工夫も行ってきたが、今後は遊びの中での友達同士の繋がりを意識した言葉かけの工夫として、「〇〇さんはどう思う？」と発問を通して友達同士を繋ぎ、遊びを発展させていくことを実践していきたい。

12月18日（検証場面①）

いっけいの氷だね

抽出児H

《背景》

先週の雨天時にしずく集めをして遊んだが、その日以来晴天が続く、「雨降ればしずくちゃん集めできるのにな」と雨が降るのを待ち遠しくする姿が見られた。前日にはM児と一緒に氷づくりも楽しんでいる。

《エピソード》

抽出児Hは、昨日作った石鹸入りの氷が溶けていく様子を観察し、「溶けると石鹸の泡が上にあがるよ」「泡で手も洗えるよ」「冷たいね」と色々な気づきを教師や友達に伝え共有して楽しんでいる。

その中で、教師が「本当だ、不思議だね。どうして泡だけ上ってくるんだろうね」と問いを投げかけると「石鹸は泡だから軽いのかな」と考えながら答えていた。

さらに、K児が抽出児Hの気づきに「すごいね」「いっけいがあるね」と共感しながら氷の匂いを楽しんでいた。K児の反応に抽出児Hは嬉しそうな表情を浮かべ、さらに氷を色水と混ぜたりして、様々な方法を試しながら遊びを楽しむ姿が見られた。



写真11・12 しずく集めをする様子

《考察》

抽出児Hは検証保育期間を通して毎日しずく集めや氷づくりをして遊ぶ姿が見られている。その中で、抽出児Hの様々な気づきに、教師が「どうしてこうなるのかな」と問いを返すことで、試したり工夫したりしながら繰り返し遊びを楽しむことができた。さらに、教師だけでなく、友達同士の共感の言葉が、抽出児Hの「友達に伝わる喜び」や「もっとやってみたい」という意欲を生み出し、それが遊びへの意欲や楽しさへとつながったと考える。

これらのことから、幼児にとって友達の影響は教師の援助と同様、重要な役割をもつと捉える。そのため、教師だけでなくもっと幼児同士の関わりが深まる言葉かけの援助を行う必要がある。

遊びの振り返りの中で

クラス全体

《背景》

検証保育期間の遊びの振り返りの中で、教師は様々な方法を試してきた。始めは遊びの様子をA4サイズの白紙に印刷し子ども達に見せていたが、テレビに直接カメラをつなげて、画面に映して遊びの様子を伝える方法を行った。

その際、テレビの画面が反射して見えづらかったり、話を聴いていない子の姿が見られた。

また、遊びの中での気づきを発表する際、友達に背を向け、教師に向かって話をしている子の姿も見られ、話し方や場の持ち方の工夫が必要である。楽しく参加し、話を聴きたくなるような工夫が課題であった。

《エピソード》

これまでの反省から、遊びの振り返りの場楽しく参加できるようにクイズ形式で行った。

教師が「これはなんでしょうか」と園庭にあったアリの巣の写真を見せると、M児は「これ、アリの巣だよ!」と得意げに答えていた。また、朝の活動の際に変わった色の葉っぱを見つけた

N児の様子から、N児にもみんなにクイズを出そうと事前に声をかけた。

すると、N児も最初は緊張した表情だったが、次第に答える友達を指名したりと友達とのやりとりを楽しんでクイズを進めていく姿が見られた。

遊びの中の気づきや様子をクイズ形式にすると、どの子も楽しみにした様子で教師や友達の話聴いている。一方的に教師が伝えるのではなくて、子ども達と対話し、楽しみながら遊びを振り返ることで、「明日はこれをやってみよう!」と翌日の遊びへの期待や意欲へと繋がるのだと感じた。

《考察》

これまでの遊びの振り返りの場の持ち方を考えると、椅子に座ってみたり、戸外で集まってみたりもしたが、その時のクラスや子ども達の様子に合わせて方法を考え、変えていく工夫が大切だと感じた。M児は、振り返りの場で立ち上がりたり、歩き回ることが多く、落ち着かない様子であった。その様子を振り返ると、自分の気づきを早く発表したくて気持ちが落ち着かぬかったり、反射してテレビの画面が見えづらく、見やすい場所へと移動していたのだと捉える。

M児の様子からも、発表の順番やテレビ画面の向きの工夫など多くの課題があり、反省させられた。今後も色々な方法で振り返りの場を持ち、楽しく参加できるように工夫していきたい。



写真 13 クイズを楽しむ様子

2 検証のまとめ

本研究では、幼児と周りの環境を繋いでいくことを意識した保育実践を行った。初めは、教師が幼児と共に過ごすことを大切にし、幼児の気持ちを受け止め、気持ちに寄り添って共感し、安心感をも信頼関係が築けるようにした。さらに、身近な自然環境を活かした遊びを楽しむために、幼児の遊びの様子や育ち、興味や関心を捉え、園庭の環境構成の工夫を行った。また、教師が問いをもたせる言葉かけを適切なタイミングで行うことで「やってみたい」「こうしたらどうなるかな」という好奇心や探究心をもって意欲的に遊びを楽しんでいく変容が見られた。これらの変容には、検証保育を通して保育の振り返りとしてエピソード記述を用いて、幼児の心の動きを捉えていくことにより、その子に寄り添った共感や言葉かけの援助を行ったことが効果的であったと考える。

問いをもたせる言葉かけは意識して行えたが、友達同士を繋げていく言葉かけが少なかつたため、今後は友達同士の繋がりを意識した言葉かけや援助を行っていく必要がある。幼児の友達との繋がりを共有する援助としては、毎日の遊びの振り返りの場やドキュメンテーションを用いた可視化した掲示物を活用した。

これらを通して、子ども達は「明日もやりたい」「もっとやってみたい」と遊びの面白さを味わい、意欲的に遊ぶ変容が見られた。よって、検証保育を通して上記の教師の援助の工夫は有効であった。

抽出児Hに関しては、もともと自然環境に興味はあるのだが、自分から挑戦し、自信をもって思いを伝えることに苦手意識があった。教師が、抽出児Hの気持ちに寄り添ったり、共感したりすることで、次第に自信をもって自分から積極的に身近な自然に関わって遊びを楽しむ変容が見られた。

抽出児Hの変容からさらに新たな発見として、友達との関わりの中で、気持ちを伝えあったり共感したりすることで刺激を受け、より深く試したり工夫したりして遊びを繰り返し楽しむ姿へと繋がっていく変容が見られたことである(図4)。これらの幼児の変容は、教師の役割と同様に、幼児同士の関わりが好奇心や探究心を育んでいくためには非常に重要であることを示している。よって、身近な自然環境を活かした遊びを通して、好奇心や探究心を育むためには、教師の援助の工夫と幼児同士の関わりが非常に重要であるといえる。このことは、自然環境のみならず、教師や友達との関わりという人間関係など、遊びを通して幼児の総合的な発達が実現していくことの表れであり、遊びを通して総合的な指導を行う幼児教育の重要な部分である。

以上のことから、研究仮説における教師が幼児の気持ちの共感や楽しさを共有する援助の工夫を行う手立ては有効であったと考え、研究仮説が検証できたと結論づける。

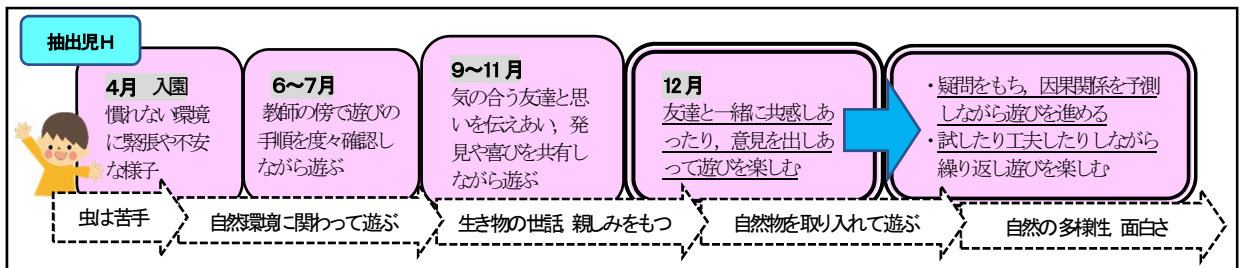


図4 検証期間における抽出児Hの育ちの様子

VII 研究の成果と今後の課題

1 研究の成果

- (1) 本研究を通して、幼児に対して問いが生まれる教師の言葉かけや環境構成の工夫が「こうしたらこうなるかな」「やってみたいな」と疑問や好奇心、探究心をもって試したり工夫したり繰り返し遊ぶための教師の援助として効果的であることがわかり、意欲的に遊びを楽しむ幼児の変容へと繋がった。
- (2) 幼児が身近な自然に触れあったり、遊びに取り入れる中で、五感を使った直接体験を通して様々な気づきや発見が生まれ、問いをもつことができた。
- (3) 振り返りの場や遊びの中で、幼児が友達の気づきや考えに触れ、教師が言葉にして伝えたり共有する援助を行うことが、遊びの継続性や連続性へと繋がり、一つの遊びから様々な遊びへ発展していった。

2 今後の課題と対応策

- (1) 身近な自然環境を活かした遊びを広げていくために、幼児の遊びの様子や育ちを捉えながら、適宜園庭や室内環境の見直しを行い、幼児自ら自然環境に関わり育つ、環境構成や教材研究を進める。
- (2) 集団での遊びを発展させるために、子どもの気づきをもとに、「〇〇さんはどう思う?」と幼児同士の関わりを繋げていく言葉かけを実践していく。
- (3) 幼児の自然環境との関わり、遊びや育ちの様子を家庭や地域へと伝えるために、保護者に向けたドキュメンテーションを作成し発信する。さらに、地域の自然環境を活用し、幼児のより良い育ちに向けて家庭や地域と連携を図る。

<参考文献>

- (1) 文部科学省 2018 『幼稚園教育要領解説』 フレーベル館
- (2) 小田豊・湯川秀樹 編著 2009 『保育内容 環境』 北大路書房
- (3) 鯨岡峻・鯨岡和子 著 2009 『エピソード記述で保育を描く』 ミネルヴァ書房
- (4) 柴崎正行・若月芳浩 編 2009 『保育内容「環境」』 ミネルヴァ書房
- (5) 無瀬隆 監修 2007 『事例で学ぶ保育内容 領域 環境』 萌文書林